

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）

県政の課題（テーマ）報告書

令和 2年 6月 10日

山梨県知事 殿

氏 名 岸 菜々香

留 学 先 オックスフォードブルックス大学

留学期間 令和 元年 9月 6日

～令和 2年 3月 25日

1 研究の課題（テーマ）

英国の博物館及び美術館における包摂性拡大の工夫

2 概要

与えられた県政の課題（テーマ）の解決に導く考え方及び対応策等

(1) 概要

かねてより、英国の柔軟な文化政策と開放的な展示環境に強い関心を抱いており、派遣先であるオックスフォードブルックス大学での講義と、現地の主要ギャラリーで行った実地調査を通して、博物館及び美術館にみられる社会包摂拡大の工夫についての考察に取り組んだ。博物館学の講義を通じて知見を広げるうちに、日英間における美術館や博物館の運営事情や歴史的な展示環境に大きな違いがみられることを学んだ。よってここでは、主に展示を取り巻く環境整備に注目し、県政の課題に対する報告を行うとする。

(2) 考察

2.1 現地施設にみられる工夫

英国の博物館及び美術館にみられる工夫の第1点目に、多様な来館者の背景に応じた柔軟な運営姿勢が挙げられる。ジェンダー、エスニシティ、年齢、居住地、身体補助の必要有無など、来館者の細やかな背景を想定した施設整備と企画は、日本国内の現状と比べると遥かに先進的であると感じられた。具体的には、スロープや車椅子専用ドアの設置、積極的なユニバーサルデザインの使用、マップや音声ガイド等での多言語に対応した情報提供、年齢を問わず楽しむことができるワークショップの開講、ハラルフードやビーガン対応料理を含むレストラン内での多様なメニューの展開等がその例に該当する。また、このような行き届いた運営姿勢は、滞在

に伴う鑑賞者の不安要素を取り除くだけではなく、館内全体の集客拡大にも寄与している。年間を通して企画展の入場券を割引価格で提供する「メンバーシップ制度」は、都市部の大型美術館を筆頭に、現地で積極的に導入されている。近年は、その適応対象をショップ内の商品やレストランの食事メニューにまで拡大させることによって、美術愛好家のみならず、物理的に来館が容易である地域市民による利用の活発化をも促している。同様に、地域に根ざしたお土産の販売や、多言語に対応したガイドツアーの展開については、遠方からの来館者を意識し、非日常的で潤いのある美術体験を提供できるように考案されたものである。来館者側に主軸を置いた上記のような企画は、本県においても部分的に導入し得るのではないかと考える。

第2点目に、館内に付属する飲食スペースの活用が挙げられる。国内では、主に展示鑑賞後の来館者によってレストランやカフェが利用される事例が一般的であるが、英国では、出勤前のサラリーマン、小さな子どもを連れた保護者ら、作業を行う放課後の学生、アフターヌーンティーを楽しむ年配のご夫婦など、鑑賞目的のない市民からも積極的に施設が利用されていた。実際に、先駆的にカフェスペースの導入を試みたヴィクトリア・アンド・アルバード博物館をはじめ、現地の多くの施設では、建築や軽食メニュー等の様々な側面より工夫が行なわれており、市民を館内へと招くような環境づくりを行うことによって公共性の向上を図っている。エントランス付近にレストランを設置している大英博物館や、テラスやガラス張りの窓によってカフェ内部の様子を屋外からも確認できるハイワード・ギャラリー等、意匠の優れた建築を有する施設では、幅広い目的の観光客と市民が気軽に足を運ぶことができるような開放性がみられた。さらに、コーヒーの売り上げの一部を、ジェンダー平等を推進する団体への寄付金に充てているテート・モダン、会員向けにカフェ兼作業スペースを自由開放しているロンドン自然史博物館などにみられる画期的な施策も、非常に印象的であった。このように、博物館及び美術館内のレジャー施設は利用者の憩いの場であるのみならず、市民の日常の一部に組み込むべき公共空間でもある。よって、本県の文化施設においても、カフェ、レストラン、売店等のレジャー施設を巡る運営方針とその役割の再検討を進める余地があるのではないかと考える。

## 2.2 相違点、課題と提案

日英間のミュージアム事情を巡る主な相違点として、所蔵作品数と規模の差異が挙げられる。ミュージアムの制度が由来する西欧諸国の博物館及び美術館では、西洋美術史を形成する膨大な作品と工芸品を所有しているため、「ブロックバスター展」と呼ばれる大型展覧会に依存することなく、一定の集客を見込むことができる。

(企画展のみを取り扱うギャラリーも例外として存在する。) さらに、数世紀にわたって保存されてきた歴史的な建築物をそのまま継承している施設も目立つため、各館の独創性が地域のランドマークとして市民に広く浸透している。しかしながら、常設展以上に企画展に重い比重が置かれており、1980年代以降に勢力的な文化施設の建築が推し進められてきた国内の歩みを踏まえると、①地域性を活かした企画展の充実、②市民のニーズの把握、③細やかな情報発信と施設コンセプトの可視化、④アクセシビリティの向上がより一層求められるのではないかと考える。とりわけ近年は、公共交通機関の利便性が確保された都市部を中心に開催される、視覚的な影響力の強い展覧会に大多数の鑑賞者が殺到する傾向にある。よって本県では、豊かな自然資源やゆかりある歴史等に密着した展覧会、地域芸術祭の開催や、地域に根付いた文化を次世代へと伝承するような教育普及活動の実行がますます求められていくのではないかと考える。また同時に、館内外における多言語に対応した情報提供や、車を運転することのできない高齢者、学生、観光客を視野に入れた公共交通の整備についても、今後検討すべき点であると考えられる。

### (2) まとめ

以上の通り、英国の博物館及び美術館では、社会包摂の観点を視野に入れた多角的な取り組みが行われている。幅広い来館者を想定した施設運営や、市民を館内へと誘導するような「開かれた」環境づくりは、施設内の垣根を取り払うだけでなく、地域市民の文化的な生活を支える上でも重要な役割を果たしている。日本と英国とでは、ミュージアムを取り巻く歴史と文脈に大きな相違がみられる。よって、我が県の文化政策を模索するにあたっては、ここまで述べたような工夫を参考にしながらも、独自の文脈と価値基準に基づいた戦略的な構想を練る必要があり、各館

の機能を「文化財の保護と公開」に留めることなく、文化体験と安らぎの場を提供するプラットフォームとしての長期的な再開発が求められるだろう。

# 英国ギャラリー運営の工夫



・多様な鑑賞者が快適に目的を果たすことができるよう、壁に縦書きで大きく示されたラベル

(Victoria & Albert Museum にて)

・鑑賞者がより一層個人の嗜好や興味関心に合った美術体験を追求できるような環境整備

(Tate Modern にて)



・国籍や年齢を問わずにアートを楽しむことができるような参加型の展示

(Modern Art Oxford にて)



・伝統文化への正しい理解と更なる関心を促すタッチパネル式の紹介ムービー

(Victoria & Albert Gallery にて)